

ゆめのこと

東天行のかにあゆむは

雲につらなる多舞海

絶佳の景を庭として建つは

少れらが山を交

韓国全羅南道南道木浦(市)の日本人小学校の校歌である。毎週歌うための小学校一年から加年を込めた。

レンガづくりの講堂での朝礼の折歌、ていたが朝礼が終ると波止先のピアノにあわせて各教室へ行進して行く

木浦で舞臺標となるのは一番上の婦が結婚となり海辺の空気のよいところかよいといふことと光州(全羅南道)から引越して来たためだ。

光州の住いには高台の御殿とよさされたお祖父の地所、一角だ。

祖父深三は何回かあつてり2大<sup>経</sup>をひ

ていることぐらしか。ほつきりした記憶はな  
い。祖父の事は母から聞いた。  
韓国へ来た前は、愛知県丹羽郡羽黒村。今の  
明治村 一帯の庄元で土地を郡で、学校や公  
民館を寄付したりした<sup>地</sup>ところだ。

源三の妹が犬山城主の成教<sup>成教</sup>の側室に在りた  
ゆえにかなりの土地を手ばなして津御をいそ  
だ。先祖からの財産をへらしてしつたら  
縁に申しさすといと物価の差の大きい光州へ  
うつり管業をしていたとのこと  
(農場経営)

祖父の家には古い廊下が有りお盆には提灯がす  
まりと並心物人のお坊者が来っていたのを見  
ることがある。

祖父の家から我が家に行くのには敷石があり、  
そのまわりにはマツバボタンが咲いていた、  
その花の種をとりのがたのしくて手紙いっ  
いにな子にさすといと不承がありその先が我が  
家にある。庭が北敷物屋く白い「い」でみこす  
れ、自然養生の加保をいとなつていた。祖父の

度はくりの本があり、実のそのころにギを  
くり本をかすまじりかをフケを糸、のくりが  
あつた来た。

多分4才のころそんな所から商店へ引越  
して、父が「のりの養場をや、ていじんへお  
金をかしてその返潮にのりの現物で」という事で  
受け取った「のり」の養場する事になった。  
「のり」やにな、たのりだ。と有りは字書<sup>簿</sup>で、  
そこでうつした字書今でもと、この<sup>簿</sup>。

小いお居で女性居員二人と男性居員一人、  
おる時居員がいたして母が配産に去りた。  
その折「おのりの中へおれも入れたいでね」と言った。  
はじめてのお居客だ。私はいつと居のがう  
スるおのりを負っていた。するとスーッとソコ  
ト帽の男性が何の苦もなく入って来た。  
その上住の所へおがうと方、私は必死に「入  
つてはダメ」とおれをひらいた。男は素直りし  
て「しるはさがり、今度はお居の去入り方と  
さうか入、て来ようとする。敵はおのりの標  
と知、ていじん、と思ひてそへかかす「父」て

たけり、と母、とそへ母が帰つて来た。「どうしたの」と母「武をやら入水てくらまいんだよ」と男は言つた。「お父さんでしよ」と母は笑つた、私は気がついた。あ、この人お父さんなんだ。て父はうす暗い屋敷で本をおんどり、何かかいたり、しなも和服だ。ソフト帽の姿でなつてはひひと存んたもの。

父は祖父の千男崎名者、祖父から一生生活の口を命本資をもらつていた。ボロボロなんだ。のちに光州の中学の校長をしていた。この明治師の庭で「シャモ」のつぐみを買つていた。おちのち若く、ねこが庭に入つて来るとおちのちなら「おちのち」で船山とあいかけていく。そんなおんどりを「ピーコ」と呼ぶよ、あそんなおんどりはほほえみ「おちのち」の。あ、若くおちのちが来た。しかしおちのちの手に足はひもおちかけらうていふ。そして母が言う「おちをやら、おちのちよ」。「物を食ふると砂がくつてしるうおち」このおちのちの命がすじかい事を知つた。

庭のフグが豊になつていてみじりがうっけ  
 いた。私は存と太の若々しい葉を取つて柔々  
 若いめんどりの食でさせた。母はみじりがうっ  
 けと少しづつそと食でさせた。  
 その日はめんどりの葉を煮わけてしめた。  
 次の朝何かをいしろうな香りがする。台所を  
 見ると母と母の祖母、お手袋の女性がみじり  
 がりをし存とらうろかしてろくにしている、  
 ボンヤリ立つていふと母が「これたべてさうん、  
 と山は存かたそりを口に入れてくれた。「おい  
 しい」でもハッと気がついて庭を見に行つた  
 と若いめんどりはいなくなつた。私は母の若い  
 めんどりを食でしてしめた。食でしてし  
 めたのだ。

跡泊りではいふ人な事がある。

母の入院してこの不運から自光の支那子で  
 洗車で二時向程かかる。母の所へ行つた母の  
 かまどのを父と下の母と三人で夕暮おそく  
 するまで、事が多かつた。夕暮コるいがか  
 多くうつた天津めんをとつてくれたり、私を

不んぶし、道路邊に虫を待つた、そんな  
 時はよくおみやげが有つた。ある時嫁と  
 と私にお人形のおみやげだつた。横はあま  
 「マミー」と書く「マミー」人形だつた。色い  
 横はあまと目ととじか少いと思つた。マ  
 ト姉の牙を見たと同じよう「マミー」人形をも  
 っている。早晩の顔がちがう。私のは京色  
 の濃い色だが、姉のは同じ色でも肉  
 色だ。肌の色もちがう。鼻は小さくセシ  
 ンがた肌色。髪も私ののは市松人形の櫛に  
 ちがう。黒い髪、姉のは茶色か、髪はオー  
 ンとされている。あまは姉の「マミー」人形  
 の牙が口を刺す。私のお人形は口が  
 にはなつて、あまは口を刺す。外に去ら  
 ない。当然人形は手が押さぬにも傷を  
 刺して、そのお人形を「マミー」  
 といふ。

にはあまの事があった。祖父の茶へ行つた  
 折祖母が「あまを」をさうつた。お人形は  
 ちがう。お人形は、おみやげと黒い大きな  
 お人形。

ミノメ、ていた。口に入りまわらない、すきまが、  
 ニれ口に入るかなと思いと、なりの「いとこ」をえ  
 ると、やはり、ちり紙をのぞいてみる。フト見ると  
 と私のより少し小ぶりでおしとどと「黄ばみ」のし  
 ずかになり、お砂糖の小粒がずらしてある。あつ  
 ちの弟が、おしやれた。私もそれをほしかつた。  
 息が黒い、あつちを扉下にほうり出してしま  
 った。

と、うもりのうれしい事もたごさめあつた。  
 筆身の「キニ—セ人形」、「とろ」の舞台にキニ—セ  
 玉のせたり、買ったもろ、たばかりの箱を、キ  
 ニ—セにかぶせたり、当然箱のこぼれが  
 して、あつちが何とも思つて、あつちつた。  
 もろ一つの箱に入り、お正月に買ったもろ、  
 た羽のえり子、元旦の朝目が、おめと、映  
 えにピンク、白、ピンクと、染りわや、右羽のそ  
 り、あつちがあつた。さう、そく首のつやと「とこ  
 めい」大いんあつち、あつち、いんあつち。でも  
 まもろとあつちして、あつち。首が、さう、さう  
 あつち、あつちのしさは、デレ、コティ、電話

があり、本当にコライとわかっていて四年の箱の  
 柄などもが柱についている。その箱の若くは  
 鞆の裏手をかしたついでに、それを手物あし  
 「ハイ」と若くは柱の交換台が出る。そこで自分  
 の番号も相手の番号も言うことなと「4202  
 -1 降って来るといってきえ。自分もあそと  
 茶色の紙の明治の4202シートがいくつかあ  
 げられたとどく、これ何枚のものでその4  
 202シートをわけてコップに入れてお湯を入ね  
 てるものがある。私はその茶色のカバーをこ  
 らう、そしてそれを自分のコーナーにしてる。

最初のコレクニコレである。2~3日すると又  
 デレクをみる。デレクの高は位置は苦んまら  
 ずか、た。

手まわしといえはレコード、木のラック  
 のついた音響機がある、やはり手まわしあ  
 らはじき。『たかや』、『學』といふ楽子つり、など  
 よろもろ、たか東海林右印の「日境の序」、『軍  
 楽部』があり「天舞でいのかんかあお...」がす  
 まか、た、『金きこふたたびかえらびとツカを

左にいふ言、左じやないか...」手子少しが不  
是をよとフアア一とテッてしテウ、針をし  
ト一トのみぞりおと方のほむうかしい。

母の死 私は長女の母に ~~正式~~ 正式にマ  
したとはない、私が生まれたころは、もう母  
は衰弱して入院していたのだ。うやまによる  
で祖父にたとえ美人だったとか

家には奇妙なものがあつた。圧入にくく、酒  
につけたもの、あとうなぎ、紐巻の銅の巻巻  
で銅の真中あたりはあやがみ。この銅のつ  
つはうなぎと入れ下から火をのける。ふたは  
しかりとあみんである。うなぎは昔しくと  
バタバタあはれ紐があみの下へ落ち、身はバ  
タバタの白いうなぎになつていく。その油を  
アブロートについで母のところに、おかあ  
も母のためにつくったもの、そのうなぎがバ  
タバタあはれ紐はあそろしかつた。でも母  
は死んでしまつた。

その少し前私達一家は不瀬へ引越ししたのだ。  
不瀬へ来たからには両親は毎夕母のところにカ

よつた。玄肉を二重に病院からかまると衣  
 するをたかえ、クレンジーに手を洗い、アルー  
 ンをしてたまたまをとり、容身保果と知ら  
 ないながら一を懸命だつた。父の手は力がたか  
 かにたつたかむけにたつた。それでも  
 帰る死んでしつた。

両親が病院に通つていたころ若か「おや、  
 と二人（おまのさん）よくあそんだ。母のろ  
 べーさんとのう長の娘色は黒い、お南島（おや美  
 人）とあしえとくわした。お葬式の日もこれを歌  
 った。おまの「今日葬式のやめなさい」と母に言わ  
 れた。

お葬式が終り両親替つかれたといふと思ふ。  
 おまのさん（おまのさん）を取つた。その時おまのさん  
 といふ。食べよと思ふば食べよといふ  
 かもし山をいかにいふ言つた。一言で病院へ  
 つれていかわてしつた。多分母が亡くな  
 った神楽屋にたつたといふのだと思ふ。ところが  
 それを機会に入院したといふ。『自家中  
 毒』つまり神楽屋からの病だ。どらくらい入院

しては何かよくおぼえていないが、父方の  
 籍地が助のたろし、ところご父の血統はB  
 型。私はO型。大丈夫だ、たろたろうか。下  
 のころの屋敷、つあににたろし。「結婚は、  
 下宿先のふ〜ところご栄養を取、こたてい  
 たりたもの。

よく年輩はいの人が「ガカシ」の席をすてた  
 私は自分でおせつを穿つた事はない。「りんご」  
 「ネーブル」、「ビスケット」など菓子、た量、さそ、  
 たは肉に食べていた。この「自家牛乳」のは「ク  
 らゴ」もりんごをたろしたもので、た。

ヤカて一年たれとたした。ホブクリの情あ  
 濃いダリートの母のすあみのせーたー。赤き  
 のチエックのふた。その服で「モハシ場」へ  
 遠足に行、た。梅のすれいだつた。と今迄見  
 た年で一番美しかった。

定例はい。時お、不瀬へ来、た。らに幼稚園へ  
 行、た。た某団生活にたれ、た。事はたか、た。  
 「おらんごららいつ...」たははあしくとと来、た  
 いし、親もす、た。く知、た。た。いものご取れ、た。ら

その統と録、平んて教訓のやがわか 己存一  
 ても 此下として「とれヨカケヨウ」といふのが  
 かるにこれ「ちようちま」の致か分？と思つていた  
 その延長での一年生

山手小学校の裏のい学校だ、た、運動場  
 は砂地が株。サウロ具をどぬてしきわい有  
 見だい、がい、そして校舎の後は山で採木株  
 いろん草が、それと帯が云、存じ不気入り  
 がこれ又いつがい、幕中にな、~~て~~採取して  
 いさうちん休み時間だ終つてしまふ教室へも  
 どりた時何と一とといふ、でも草花を持、  
 た子、河津なかりを拾ひ席いつい、~~た~~ 気~~を~~に  
 何も言われなかつた、

やがて仲良しの友達も去来た。

「一銭同化ハケ點十からとそれ、その意味不  
 明を×口列々としてゴムもをとふ、

肝月景子さんの庭で筆で日をもとらんた、  
 ゴムゴムのな、たせもを片牙を不白をすびせろ  
 一景を肝月さんの弟にわたせた、肝月さんの家  
 は東屋のサウレレのたろ亭台の甲斐とにたつ

在。<sup>あ</sup>多田肝日さんが「あの音のサイレエの新  
 への京やしのほ、ちのよ」と言った。そらか  
 私も行くらと二人でサイレエの存るところへ  
 行、た。サイレエの存る所は鉄条網でかこま  
 れてゐる。下を見、るとかなり高いことかゆか  
 る。赤い二人の人が少し小さく見え、かゝた。  
 鉄条網をそとへてサイレエの存る向うがゆへ  
 美がつく。ところが隣りの足が動か存り、パ  
 テイが鉄条網にひかか、てゐる。京もち  
 せしむ、げ、二人の足がとれな。 「ま、て  
 てか」と京もちやい、て行、た。ボレヤリ  
 子、てい、ると京もちやい、のあせえんか「驚か  
 ないで」、と叫び存る。巨級をかゆ、柔子。そ  
 してはボレヤリ子でゆ、かか、てい、パレ平  
 子を、とられた。その夜着が去、時、世か  
 「あ、れ、さ、れ、ど、う、し、た、の」と八サミごき、た、た、  
 し、子、の、事、を、き、い、た。「あ、う、な、い」と言、た、た、  
 ぼ、子、て、い、た。

強には「あまみごき」といふ系種がある。  
 かや布種のは柄がどんぐりの葉とどんぐりの色

は浅い草色を甲かとした春らしい色だった。

私はその「じんぐり」をきかぬわまりぬいた。

そして両手いりばいになつた「じんぐり」を母の「これ全新」にレダリオと見せた、母はその様子を見た。

この年私にと、二つイベントがあった。

音楽会である。日本人のほくらいの小さいおとこつて運動会、音楽会はあぐさのおま

つりだつた。ほくらいの定期祭から母の人々が講堂にみつたり、おまの音楽会を聴き、すむる席を最り座布団の工にみたりそのおまをきつたのである。

「うららうららの春日より、秋のお花がまつたかり 今日はおのしいおまつり 花をかきしておまの行こつかそつておまを 咲いた

咲いたおまの花」とさ「秋の工におま。おまの去着物のおま、秋太印、の一場面、<sup>五は</sup>毎車のついで全紗の着物でおまだつた。秋太印は夕つに君、下は有馬君、二ん君す敵は男おだつた、

その着物に「すんかん、ほくら、ご様見物



一晩ほろとゴロッとゆすれつゝ了のた。  
 三年生はなととさすだろーんはゆすれつ  
 しつた。三年生の気持は「ふゆゆりふゆり」  
 「ふゆゆりはふゆゆりの日よ」とあつしゃ、二番  
 庭の庭空の花を降、こくみふゆゆり。皆飛  
 れもゆすれもと花をゆすりぱい降つて来よ。その  
 こころゆゆりの空も庭があつて自然に咲いてゆゆり花  
 があつたのた、教室は花の香りがふゆゆり  
 花びんさびしはふゆゆり。邦楽甲のふゆゆり  
 花、他の教室も花た。花つてふゆゆりなつて  
 一目たつた。

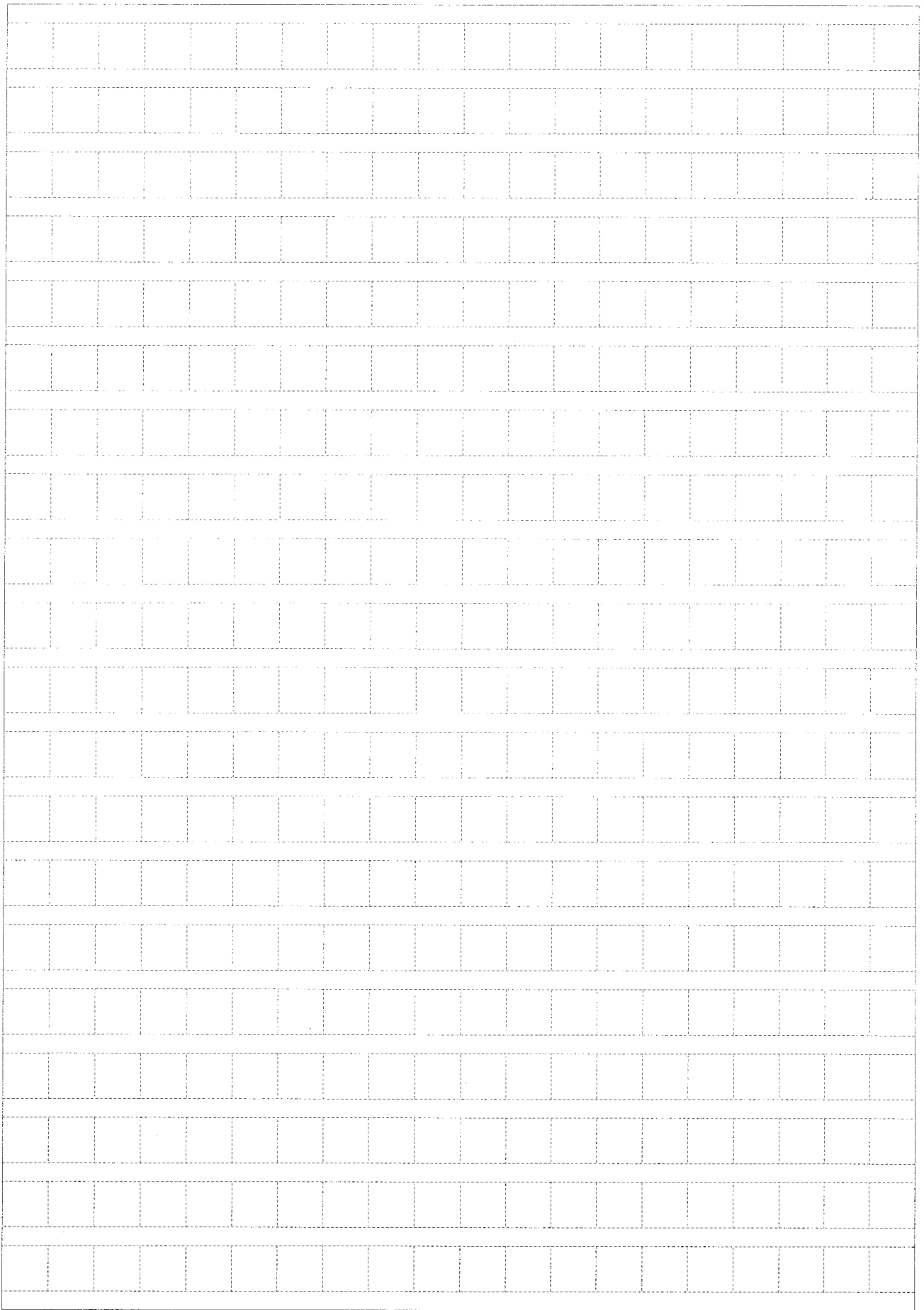
もう一つ左のしいのは「つくりな、ふゆゆり。  
 花をのふゆゆりつてふゆゆり見はるしゆふゆり所  
 へ行ふ。花をのふゆゆり。花をのふゆゆり  
 増えしゆ(見知事) そのふゆゆりはふゆゆり本海  
 海も見えしゆのた。そゆゆりつて「そゆゆり」  
 を一つづつくふゆゆり、「そゆゆり」をゆゆり  
 がふゆゆり遠をゆゆり。座つたそゆゆりは「そゆゆり  
 ふゆゆり」花をのふゆゆり花をのふゆゆり  
 花をのふゆゆり、「ふゆゆり美しいのたゆゆり」と思つ

やがて敬亭へかき、「マア今迄はととを女を  
 弄しやう」となる。感動したとをその子へ  
 かく筆が出来る。

でもこの世をすいそ投をやめてしまつた。  
 その時の世にあらたか、たの女を。異國の  
 公社をたつ不業ご一人暮しをしていふ事その  
 うちにはなくなつてしまつた。

丁度そのころ紀元2600年と人々行説をした  
 の提灯行引と内地ほどでないけれど国全線が  
 一歩ずつはかたむいてゐた。

家の半は早知そのもの。和歌探とよく遊んで  
 いた。クリスマス甲の力マア一つ電車を  
 フリ、ゴガチをいふ「ママゴト」といふ。不海の行  
 合はも早知たつた。約と不人の目や人知は  
 母の兄達がいて。本家の伯父、のりやの伯父  
 宇島橋やの伯父がいて正月の新年会は盛大  
 だつた。本家2階の「ファミ」をアツとと30いよ  
 うぐらうに作る。おたれたそーブルにこちを  
 了か次に何とばれて来た。伯父の家族は士勢で  
 子孫が九人。全開：4の人が10人ぐらゐ。そ



の地通、乙采の徒業是た人の子にその在り台  
 所は所コリクせんとの手紙に在り人か  
 人程いた。なからごうそを佐のになり  
 ていこのち、右平に申交にありて行くも、  
 台所はごうながえし一日半迄かた會事をして  
 いた、中ごうまごを入れたかじかあちとちの  
 あり皆さんではたまごを食、て行く、まごを  
 こしてこゝに預け給母必小皿にとつてくわす。  
 辭の在りた家と何とあがること。

右の台所は、若をくり出したお母名場は流  
 流としたタイに張りて(元赤子此の物た、と  
 とか)預め入ると伯父が子供達を次々にやそ  
 いたも流る所はるせんで流るとざありお湯を  
 かゆ、ハイ次となり預めやまのつとて  
 流るごうあつた。

伯父は本通の所の商売街の会頭でもあつた。  
 富屋は朝鮮、満州のガラス(アサセガラス)の総代  
 理屋と業屋であり、大はんじりであつた。

アサセガラスとつたは伯父の著いと  
 ち。体にコルクをのちりて島をアサセ

の原料をさがしおぶひたと言ふ。そして産物の多い三角島を見つけたのでそこを買い取り、魚鱈で「アオヒガ島」を建設したと云ふ。

私はその話を感心して書いた。無名な島の無数の島々下でかしておぶひたんで私には答へられぬ。

この伯父達のいふ下通は商店がそろつてゐる町だ。呉服や洋品店、茶葉店、文具店、かみ屋や、雑貨、自転車や、何でもあつた。洋品店の若い店員がちらちらとパーマをかかしてゐるのを不審でゐる。もちろん美容院も不審、神社、伯父達の「ワリヤ」、博覧場や、コナニ銀行、その銀行のレニかの標榜工としてよくのぼつた。何でもあつて栄しい所だ。

私が家は、父の岩井の中卒の校長をいじつた。岩井の祖父の家から運部、木通の家は母とおぶひの姉十三と妹二人だつた。その妹はクリスマス用の豆電球を一つづつをいじよく「ママボト」をいじつた。

そのころは終是の友達でなく大勢と多えび、  
 「花のうもんめ」の義形「おにほは」で、こゝをしたら、  
 休みの時肉店へのあそびで夢中だ、と。そして  
 家では毎とりどりに干ろそろをさの豆屋で下  
 下様とあそんむりだ、

お辞書もたのしみ、と。春になると「ダリ  
 ービス」の急なもの、「あがとん参をいれため  
 マゴゴとせしたもの」朝早く取りたてのダリ  
 ービスを売りつくす。だから右も左もダリ  
 ービスのあかず、午後のお辞書の折返し  
 せん豆があつていた。

平和なこんな日がつづいた折昭和16年12月  
 8日、米英と戦争がはじまると、子供心に一  
 せしめ地不中かきつた。何れかおろそりだ、大  
 丈夫なのか？という思い、

そして我が家の東屋行。姉十三子の大学通  
 りの右のまが姉と父が栗原へ行つた。当時は三  
 千円が買つた正月奉の空が、一元飛つき内つ  
 きの家が三千円だなんだと今だつたら十軒だつ  
 てすいかえり、母と私と妹も栗原行きとなる。

木通から「大田、北行きのリカ元釜山へ行く、  
 吹きさらしの木通を歩かぬと云うリカの言葉が  
 此。その上、三月末の日は寒く、汽車は軍人軍  
 用で保台も運り方まで行く。たまたま左汽車  
 もいっしょいでの中を、そこにはたまたま一人  
 がいた。母は妹をあんが、私はカバンと  
 口をきつてのちを、海台も運り方まで汽車  
 を見送った。すつかり日がくると最終の汽車が  
 来た時、一人の軍人が母を押しこみ妹を袋か  
 ら入れてくると私もぎこちなくぎこちなくのま  
 づは足を大田の、との思いで汽車にのりた。

私の口をきつてのちの中には勇たやんの  
 母は(水)（水）が佐、てく  
 ちあしだた。東京迄の資料を、しかし私の  
 のおしりの下で平餅の辺形にたてている。

釜山に着いた時母は私を旅かんでおとんでし  
 りた。でも、それ、連絡船にのり、たつた  
 とき、長い船の並べたのち、たつた  
 たつた、顔色の悪い母、母の唇がから  
 おりおちろにたつた、それ、もう一つと口

をきいていない。母の考えていたことと私の考えていたことも同じにちがっていない、それをわける事は出来ないので、ひたすらじつと待つ。アリの採り少しづつ増えること、やがて母と私が金具を子にいたる途中の事がすーと立ちり、船に乗るたのほろえしたつたのだ。それからしばらくをさげゆつくりゆつくり進む船にのぼる。

下関の着いても汽車は相変わらずの混雑続きで、もちろん新幹線もない。長くなった。母はねえ、妹は中耳炎、栗原は遠く

高月までの生活にはいそぎ。妹は中耳炎の手術、サッカーの黄色のワシターズがゼシヨビシヨ、その懐かき書は今も耳にのこる。あの懐かき相づねも存するようになった。

杉並平田小学校に転入、学校のきたなれ奉還初場もあそろしくせまい、ク羅斯のメンバーは妙にこっそりしゃべっていていそぎなくかたまっていて、通学路もぐねぐねとせまい、これ

が栗原の一部かとおどろいた。

アヌヲヲ<sup>ア</sup>ウトノ<sup>ウ</sup>名<sup>イ</sup>ハ<sup>ア</sup>ノ<sup>ニ</sup>廻<sup>リ</sup>を<sup>ゆ</sup>ッ<sup>ル</sup>リ  
 の<sup>字</sup>ヲ、その<sup>内</sup>に<sup>「</sup>世<sup>ノ</sup>カ<sup>ニ</sup>」<sup>の</sup>倒<sup>路</sup>形<sup>が</sup>あり、  
 の<sup>序</sup>リ<sup>子</sup>ヲ<sup>と</sup>と<sup>こ</sup>ろ<sup>に</sup>赤<sup>い</sup>層<sup>根</sup>の<sup>家</sup>が<sup>あ</sup>り、  
 子<sup>を</sup>左<sup>に</sup>折<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>山<sup>手</sup>小<sup>号</sup>校<sup>が</sup>あ<sup>っ</sup>た、  
 扉<sup>下</sup>は<sup>じ</sup>カ<sup>セ</sup>勸、校長<sup>室</sup>の<sup>前</sup>に<sup>「</sup>ア<sup>ノ</sup>」<sup>の</sup>標<sup>せ</sup>い  
 が<sup>あ</sup>り山<sup>手</sup>小<sup>号</sup>校<sup>は</sup>美<sup>し</sup>か<sup>っ</sup>た、

移<sup>回</sup>には<sup>構</sup>堂<sup>も</sup>な<sup>い</sup>、<sup>楽</sup>し<sup>い</sup>こ<sup>と</sup>も<sup>な</sup>く、<sup>困</sup>  
 り<sup>こ</sup>と<sup>も</sup>な<sup>い</sup>、<sup>「</sup>夕<sup>と</sup>夕<sup>と</sup>、<sup>と</sup>日<sup>を</sup>送<sup>つ</sup>た、

や<sup>が</sup>つ<sup>六</sup>年<sup>生</sup>に<sup>な</sup>り<sup>世</sup>の<sup>中</sup>何<sup>と</sup>を<sup>考</sup>へ<sup>せ</sup>せ<sup>二</sup>  
 子<sup>し</sup>ら<sup>な</sup>、<sup>と</sup>来<sup>た</sup>、

“<sup>我</sup>が<sup>大</sup>君<sup>に</sup>召<sup>さ</sup>れ<sup>ん</sup>た<sup>ら</sup>... <sup>い</sup>ざ<sup>な</sup>れ<sup>ど</sup>日<sup>下</sup>男  
 子<sup>」</sup>と<sup>白</sup>の<sup>丸</sup>の<sup>旗</sup>を<sup>示</sup>、<sup>二</sup>兵<sup>隊</sup>を<sup>送</sup>り<sup>回</sup>  
 が<sup>多</sup>く<sup>世</sup>の<sup>中</sup>が<sup>「</sup>ザ<sup>リ</sup>ザ<sup>リ</sup>」<sup>と</sup>肌<sup>を</sup>な<sup>ぞ</sup>、<sup>と</sup>も<sup>り</sup>  
 の<sup>回</sup>が<sup>つ</sup>い<sup>く</sup>、<sup>鬼</sup>幕<sup>の</sup>集<sup>団</sup>疎<sup>開</sup>が<sup>は</sup>じ<sup>ま</sup>る、  
 私<sup>も</sup>為<sup>念</sup>の<sup>対</sup>象<sup>が</sup>栗<sup>原</sup>の<sup>右</sup>川<sup>か</sup>ら<sup>四</sup>十<sup>程</sup>の  
<sup>荒</sup>地<sup>に</sup>の<sup>新</sup>洞<sup>院</sup>と<sup>い</sup>う<sup>不</sup>孝<sup>の</sup>を<sup>語</sup>が<sup>は</sup>じ<sup>ま</sup>る、  
<sup>朝</sup>六<sup>時</sup>の<sup>あ</sup>き<sup>に</sup>鞆<sup>布</sup>子<sup>さ</sup>、<sup>洗</sup>髪<sup>は</sup>十<sup>分</sup>何  
 と<sup>の</sup>江<sup>倉</sup>川<sup>へ</sup>行<sup>き</sup>泳<sup>ぐ</sup>て<sup>い</sup>い<sup>な</sup>川<sup>を</sup>右<sup>に</sup>あ<sup>つ</sup>て  
 子<sup>の</sup>水<sup>が</sup>あ<sup>ら</sup>う、<sup>と</sup>い<sup>う</sup>あ<sup>り</sup>夕<sup>下</sup>川<sup>を</sup>右<sup>に</sup>

うかえ、て来る。

こゝでの生活はさして、らくもなから、苦し  
 二ともなかつた。淋しく泣く子もいなければ  
 ど私は何の感<sup>動</sup>もなかつた。子供達は六年生  
 五年生、六年生と三、四年生の姉弟で、私の六年  
 生のための学年班費もいなければ存さず、掃除  
 の紙屑が臭いとか、体操をしないとかいふと  
 か、手ごまを、在堂によぼれてしかるた。  
 工場の言う事が正しいとも、生徒の言がどう  
 とか何とも感<sup>心</sup>なかつた。買物一ときいてい  
 のかな？、二十四時間寝からせられていふと  
 いろいろな事があつた。それを子供が一人で解  
 決しなければならぬ。それが出来ぬ子が  
 11じの社象になる。ある子が下痢をしてか  
 るのバツとがなくなりその洗濯を同じ班の  
 子に押し付けられ、工場のいふところ、洗濯はつ  
 たいに合川であつた。そこで11じの社は、  
 新病院総務150人、いろいろ客に11の50人が  
 それを食つていふ。それ層級のものをこゝで  
 ふたりして、一口食させようか、と食費の制限

とすとのである。荷物の整理をし、その本をふんをふりをして、とすの指をを見ようとする。はじめをとりながら自分の身があるのと皆知か、とすのた、いじゆのう人組は勢力を増して、とす。うく組が大勝利をあげて、果敢へ受験のたゆみ、とすた。その子はその後亡くなったとすし、私にしか人をとすの役は、た~~た~~悔いながら、とす。私に早急をいぶ、とすた。今も胃の奥にツレと一つのかたまりがある。

そんな事がある、とす家への手紙に「三島が官が物け豊宮で學んでいふた、とす。先星によつて横田がある、とす。意にそわなものは設け、とす。王で軍隊と異ならず、日本国中を統制の社会だ、とす。

「東京が空襲やう、とす。活だつた、とす。皆動揺、私に何もしてない、とす。原住とふたは、とす。とんた、皆し一人とす。とす。一人とさせ、とす。私に動具、とす。昭和19年9月に疎開し、とす。六年をほせ、受験

のため、26年3月札幌へ帰った。

存つかしい我が家以外と母と妹の二人だった。  
父は札幌倉庫学校の丁組長の教師として函館の  
基から通って来たが遠くで通い続けず世の死を  
トクと、沖電氣に徴用されてしまった。母は薬科  
大へ行っていたが製薬会社に徴用、それ以外家  
を語った。

その頃の食料はすべて配給、とほ名ばかり  
薄配、薄配の厚給、たまたまのぼくさった  
すっぱい臭、大根のすねはし、べつととしたす  
つ子いもであった。私が疎開先から来た手  
紙を信じた母と妹、それが妹（手紙を取ったエ  
のつ子いも）の疎開（？）をやる。すま  
ない帯をした。ごめんね、敬愛せんがめ  
ん!!

私はと学校受験となりたがそのころはどの学  
校へ行くか担任の先生が手取り、それも一校の  
み、失敗して下りたおそれ（略）である。  
私は「オノエ専修学校」となつた。新宿の今  
のガブキ所であった。新宿の東口から格子戸の

仕舞屋<sup>9</sup>づく静かな所だ。実は受験の用意を  
 とほもしての事だ。た、課外会でボレタリマ  
 ズただけ、父から「昨日の昨日はニシベ  
 ンとありやせん」とあったからさほどいものな  
 ども何の不意もなく試験会場へ行った。座の  
 着いた空襲警報のサイレンがなった。「人々  
 全員合格はしそわからず帰るまい」となと言  
 い合格となった。「3ヶ月」

小学校のークラス一人しか入れないと「う  
 名川校の生徒はな、こしよった。その学校が  
 のあいまは「ごまがんでろ」はがれしくと言  
 える。校章はウエストにフタの文をゴダの  
 もの。その年五等築世学校は3日で空襲をや  
 けてしよった。

それからの学校生活は強襲の課外で引越した  
 ところの材木置場、(線路をいの家はニヤヤ  
 だ)校庭はその柱をいを運んだのだ。そして  
 学校の移転先(次学校のある所)が現場とな  
 った。そこでこの男は4ヶ月仕事、ハッザリ腰  
 で鉄をもちおかほを運ぶなりサマイエヤか

早苗やを居つたりした。肥料が必要で近所から下ゴエをもとに買ってくる。下ゴエをまらしたは大変で二人でお金をかつぐが息がかわないと下ゴエの堆の毛のかがやきとほねる。たまたま下ゴエに負けた人が後をかつぐ。

学校生活と言つても学校がやけつたのだからもっぱら林木運びと農場。

家は母と二人、妹は子だ一年左になつたのにならぬ疎開した。

家族の奥工の運は竹やり(本当は竹をけおつたもの)でマイヤーと突く練習、くやりのレイの穴掘りと在郷軍人が指導している。

東京へかえり、乙子も不在の頃は中しり空襲で空が真赤になつた。空は昔の夜は星がまたたく存在ととんでもない。其頃の空が全面とくなく赤一色、地球がくる、かき思ふ。3月10日の下河大空襲だつた。おとこ知つたの古く死者10万人。一夜に12万人消えてしり、たつた。とくなく毎晩毎晩空襲。夜は敵機B29の発射台のたつた。縮隊組んで紙ぶきB291572と

であつた、なればおそろしし、おそろしき分  
 だたのほそともかぞふる、次の日の新聞と比  
 べたりのた、新聞社がほとんどやうやくの  
 たいめ、朝日、毎日、おみより、日経 産経  
 東京の新聞社が共同でタブロイド型の新聞を  
 出たのだ、縮減して来たのには物残とかいふ  
 あり、何てな? と思うが、おろかおろかほそこ  
 とそりた。

私の家は陸軍の訓練場をいかにある、あつた  
 不装弾が天井にフキさつた、と有り埋つ男  
 生二人が果てその不装弾を手ごゆきと  
 訓練場のほろつげんボリとほろりました。

現在不装弾が欠つたかといふとたさしき電車をと  
 り近く40mは避難地となるが戦時中といふと  
 のほこんなるもつた。

ちなすに攻撃はまず照明弾で目的地を明し  
 て了る、そこへおかけで焼夷弾、大寺の建物の  
 はバク弾と左よ、照明弾には白のきんいなす  
 イロのりりボシがりのいふふ、着物はこれら  
 服は不綿しか知りなき、私にこのタイロとす

は、はじめと異なせんい。おもしろくひろって  
 みる。その中の長いサイロは、おまげをむ  
 すおのじと居るい、や、よく顔とつくる。学  
 校で見つかり、大蔵庫を、ボットを物入れと  
 いわゆるおまげをみる時代、先まも物入れ組  
 だった。

のんびりしたことを言う、そのおまげは、音  
 の音もやめた。私の家は駅から15分ぐらいの  
 ところにある、おまげの視野の中には何も無い、や  
 け野原だ。駅のホームがボットと見え、そ  
 のおまげを、つぎへで行く、おまげは来た、お  
 まげに行けば遠道なのだ。ところどころ酒や  
 さんのおまげを、おまげとやていふ。おまげの音  
 がおまげを、おまげと、おまげを、おまげと、  
 おまげの生活のおまげを、おまげの、おまげの、  
 おまげ。

我が家も大蔵庫の薪がとんで、おまげ  
 をおまげ、陸軍の氣象部が、おまげを、おまげ  
 のおまげは頻繁に、おまげの薪を、おまげ  
 も大人のおまげの、おまげの中は、おまげ

火の橋が燃えて来る。母屋根<sup>た</sup>のほり<sup>た</sup>ゆ  
 うきで火の粉をばら<sup>た</sup>おとす。この火のこも庭  
 ほうまごた<sup>た</sup>を消し、<sup>ほ</sup>消しつへ入れ<sup>た</sup>て<sup>た</sup>時  
 私、次の日の燃料になる、

毎晩江戸の火消の橋をこも<sup>た</sup>をしていた。  
 そのころブ<sup>た</sup>ロ<sup>た</sup>フ<sup>た</sup>の<sup>た</sup>な<sup>た</sup>な<sup>た</sup>い。どこもき壇  
 である、空襲のあとその植木が<sup>た</sup>ま<sup>た</sup>で<sup>た</sup>ゆ<sup>た</sup>た  
 跡にしんたりとたおれ<sup>た</sup>う<sup>た</sup>なる。火がせの  
 ゆきを<sup>た</sup>して<sup>た</sup>くれ<sup>た</sup>の<sup>た</sup>ち。私の家も<sup>た</sup>重<sup>た</sup>壇<sup>た</sup>が<sup>た</sup>左<sup>た</sup>  
 かつた。それが毎晩の橋を<sup>た</sup>つ<sup>た</sup>ぐ<sup>た</sup>とそれが<sup>た</sup>田  
 舎<sup>た</sup>なり。おそろし<sup>た</sup>いと思<sup>た</sup>わ<sup>た</sup>ない<sup>た</sup>から不思議  
 である。

そのころ食糧は<sup>た</sup>どうして<sup>た</sup>いた<sup>た</sup>ので<sup>た</sup>あ<sup>た</sup>る<sup>た</sup>。  
 何もお<sup>た</sup>ほ<sup>た</sup>そ<sup>た</sup>つ<sup>た</sup>いな<sup>た</sup>い。

相<sup>た</sup>妻<sup>た</sup>う<sup>た</sup>が<sup>た</sup>島<sup>た</sup>比<sup>た</sup>事<sup>た</sup> ~~の~~ その肉に「地内食を」が  
 交<sup>た</sup>歌<sup>た</sup>を<sup>た</sup>たし<sup>た</sup>そ<sup>た</sup>くれ<sup>た</sup>た。

「おのこの櫻 谷のゆり、人こそ知らぬ 咲  
 きはあろ、清<sup>た</sup>心<sup>た</sup>を<sup>た</sup>心<sup>た</sup>に<sup>た</sup>こ<sup>た</sup>こ<sup>た</sup>せ<sup>た</sup>を<sup>た</sup>道<sup>た</sup>を<sup>た</sup>い<sup>た</sup>  
 し<sup>た</sup>ん、この校<sup>た</sup>致<sup>た</sup>を<sup>た</sup>知<sup>た</sup>つ<sup>た</sup>て<sup>た</sup>い<sup>た</sup>の<sup>た</sup>同<sup>た</sup>敵<sup>た</sup>を<sup>た</sup>は<sup>た</sup>少<sup>た</sup>  
 い、母<sup>た</sup>と<sup>た</sup>ん<sup>た</sup>ど<sup>た</sup>の<sup>た</sup>人<sup>た</sup>が<sup>た</sup>探<sup>た</sup>察<sup>た</sup>、その場<sup>た</sup>に<sup>た</sup>い<sup>た</sup>な<sup>た</sup>かつ

たのであり、だから島仕事も、下ごえや木杓  
運びの経験者も極一部分

店して、長崎の港にうは情熱のなりの時分、  
知つたのはおととあとな

終戦は中野の農場の機具買場の前まで来た、  
天皇の言、この事はよくわからぬが、先  
生の様子から、おととしで真筆に負けたいの  
かな? と思つた

家へ帰ると母はその事を知っていた、とに  
かくおととあ)てくまはもう来ない。お  
うに管制の黒いカ一平ともカ一平を不審者、  
黒いカ一平ともわからぬ、所々甲北つ水の管  
理、庭と玄關と竹の垣の隙からの整理と  
すよなう家の中でおととあ)の来なくた、  
しつた。いや何をするかはよゝゝの気がか  
はつた。

でもその時の子、だつて国がやぶれ乙し  
ては、おととあ)にたつのは自分一人。収入せぬ、  
不測の銀行からの利息で生活はなし、国債  
は只の紙、まともとか弱い文はせられ  
て



じりである。「東京不レ夕」が便つていふ「あつ  
 草模様のフ口之キに「コフベバ」もつてみ  
 中へ背負いそのコフベバを履き、といつて  
 寺の奥の駈けだま、と云つていふのみ。け  
 ずかしくつ何と言ふない。おと「野郎やん何  
 もつてらんぢい？」といふ人女があらわにコ  
 フベバを履くやうなところがある。これは女並には不  
 かしかった。でも老女といふと次はバを履き  
 してゐるやうな

そんな中、学校へ通つた。でもやけに学校は  
 ないのて四谷の山学校へ向かひしこの学校で  
 ある。新宿の甲州口から来りてこの学校へ行く  
 長らなといふ教室で居わたる。いとくろ又つ  
 即座にふたり三人の人が入りのだから早いも  
 のがあのやうにあらわに、あとは云つていふ  
 ければなるない

電車はものすごい混雑で寛がろすもドアも  
 ない電車、連絡の所でもやつとつて、新宿へ  
 着く子でかひと仕事、堂りがかひと二匹のこ  
 下りへ逆行してそのこつて。雨の日はみじか

ケケがなく歯のちが、た下駄で走るとどろろ  
ハネが頭迄つく。そんな思ひをしてどうして  
学校へ行つたのたうら。

ある日教室の片あそで何やらユツユツと活  
声。先生が「何ですか」と新宿のやみ市で「おれ  
を賣つてゐた」とのこと。「では行きなさい」と  
と先生はとめざらざら新宿のやみ市へ行きて  
らでら新南地区の人々を「おれを賣つて来た  
と〜る匹おつた」と思ふが教室中いりしのがお  
いでいづげい。本堂に會つた物販の女。「お  
れを賣つて来たおれはたてがらおのた。

たしは新宿のやみ市を取りしつてゐたの  
は尾陣理 裏社会が表をとりしつてゐた。

我が家も食で物がない、田舎者知りあひ  
もなく、農家に買出しに行く、川越、入管、  
へちまがたへ行つた。あせ道下あつておれ  
いとも「おれを賣つた物はない」とおれが  
存くはとらうら。お金以外に金子やけが存  
くはふりむいともくれない。そのおれのお  
着物に次々消えて行く。おれ。おれのおれのおれ

のとをーしは「あーもつたー」と思つたがまづ  
 まいどになつてつづた、たつたよくりさの  
 まいもつらつらしながとあや道をかえつた。  
 学校裏場は相尋た、陸とろもあつた、お  
 茶づあつ、そのお茶をかり取つたあとのあつた  
 をひらろ。誰か見とほいないの見つかうあ  
 物とあつた暗く存、とから行く。

私は「しー」のおちほひろの絵がまらいが、  
 どんをみじめな思ひでおちほひろつたあ  
 つか、見たあつた今夜の「あつた」の原料  
 線のため、身をちぢめてひらろおちほひ。それ  
 でおちほひ。家へ移つたかえととせールビレく  
 らいのびんおちほひをいれ、かつて各線と  
 ち見送つた襦の杖でつら。ついでもつたも  
 もみから先はすあつた。1-2つと声に  
 かせえあつた。でもおちほひから「あつた」  
 の10の1くろいが、ほとんど「おちほひ」  
 ち入れた。おちほひあつたがそのあつた  
 がして鍋に入れち、煮たまつた燃料もあつた。  
 ガス台はおちほひはあつた。

ラッパの森へ遠路をとりて行く、木々の枝  
 だ、曇りのある小枝を七輪の甲に入れておき  
 がもたみわけびなの、下も新聞紙もわり<sup>ほし</sup>糖  
 杯なものをたの、シブうちわでけむりたせ  
 たらあ、とにかく不雑水を保ちながら  
 ばあさん、ひたすら努力、運きたく存  
 り思いだつた。

こんな事ではどうにもならない、高田幸の  
 やみ市で「今川やき」をうけてきた。

新宿と同じように、ここは茂平組の支配下  
 の下は「やきや」や、この事でやみ市のはじ  
 め仕事が始まされたのだ、材料？買出しの「さつ  
 子いも」香味料の「カヤタリ」物の交換の「うじ  
 ん粉」そして炭、母と三人それらをやみ市迄  
 運ぶ夜7時くらいから終電迄の夜中の1時  
 で「今川やき」を売った。冬にむか、21日の  
 仕事は云々の人達が買ってくれた、その場で  
 食べた人、もちかえり人、昭和10月の「今川や  
 き」もつた万命をうけたのが私の仕事、母  
 は<sup>(新聞から)</sup>せつせとやう、毎日の仕事、私は何とも思

左かつ右か、母はフツツかつ右かと思ふ。昼の材料をといひて、キッチンでスライルが、夜のは菜、材料をといひてとひと言に言うけれど、さつまいもの買出し、菜やうどん粉を物々交換、今のやきのあんこをつくらう。私<sup>は</sup>はと丸か、学校へ行つていふのが、

11月、母が探偵かあ帰つて来た、

高田孝の歌を聴かせる行く、どろどろとホーレにありたつ中ですぐわかつた。しかし母は年若いおばあさんが心配事をかかると、お顔、「おつちやん!!」と呼びかかると返事が無い。「おつちやん」無表情だ、小さい子供の無表情つてあそびしい。近頃のふねきと「おつちやんどの人?」「その子と答える、子方だ、なくおつちやんだのね。どうしよう、とねかきそばを一緒に食ひてお母か学校迄行く、学校には母が来つた。「解散」となつたおとねの母は母がしがみつき「ワ〜」と泣いた。大声で泣いた、わかつた!! 可憐な物かつた!! どんないふを渡つたか、小学校一年生の

子供が自分を塗り替えていくフラシ、大変さ  
 皆わかっていた。わかっていたよ。家にかえるると母が  
 手袋履きでも少しづつおきあげ「さ、おんこ、お  
 くしんあつうおと席下に干してあみ<sup>さ</sup>、その  
 おを呉せよ。どいこ<sup>おんこ</sup>わからないお母を存  
 んとか安心させたいと思<sup>おんこ</sup>った、ほっぺが真赤  
 だった教ちゃん。今やしわしわだった。袋に  
 取りものを取らせてもらう。それでいいと思<sup>おんこ</sup>った  
 が今度はお腹をこわしてしまふ。大場<sup>おんこ</sup>の  
 医師の診へつれ<sup>おんこ</sup>行く。ブドウ糖を打つても  
 ほう。アノ<sup>おんこ</sup>ルル入、おんこの液は<sup>おんこ</sup>ご<sup>おんこ</sup>てい  
 だ。それでも少しづつおきあ<sup>おんこ</sup>る、さ。

おんこそれ送らぬ<sup>おんこ</sup>んお自分の夕方<sup>おんこ</sup>を<sup>おんこ</sup>て  
 教ちゃんに皆あげて<sup>おんこ</sup>しまふ。そんなものおん  
 こおんこも<sup>おんこ</sup>ない。とにかく教ちゃん!! 教ちゃん  
 ン!! 転<sup>おんこ</sup>つた。

しばらくたつと又おんこ学校へ行くおんこなり  
 今もやまにも一緒<sup>おんこ</sup>に行くおんこた、さ。

夕方一緒<sup>おんこ</sup>にやま市へ行き、夜おんこおんこ  
 教ちゃんと一緒に一旦家へ帰る。教ちゃんを

をふいて又お茶をのむとす。その数分やんと  
 家のかえり際、気持の申れらるる月めきとり、  
 ビーゴツツを穿ち、ビーゴツツをぶつくとら  
 入れ三人して食がたがら帰つた。おひしか、  
 た、右のしかつた、もくもくと食がたがら一  
 言もはなすことなくそれでいこはなく果し  
 かつたの故、母と存ししこの二人がやのビー  
 ゴツツ、今も教をやんと二の語とある。

今もやきの仕事はかえり時、大變、残つた「うど  
 ん餅」「あんこ」「七輪」「炭、夜毎持つた」はあやう  
 なる。でも二んを踏、お茶持たつた塚の忠告、  
 氏（お茶より新用の記名）その若く青年が一語  
 のお茶運んでくれた。次の日仕事があるのに  
 もくもくと運んでくれた。「お、此とろごさ  
 した、感謝するのみ、お茶持たと思つた今  
 どうしていふことか。

私は宿題の「母の故郷を見よ」といふ宿題を  
 してあらうた。塚のさんとし入れの新築の  
 りんごを採、この頃能へのビクニヤク、<sup>いば</sup>右つ  
 した。食べやすくすゝめりんごを採つ

と半分はわねの所。探と二人感動した。耳の  
りんごの種をい何だつたろ。

その頃の倉程は「聖いもの種」「とうもろこし  
の種」「バナナとしたりすいも」とうもろこ  
して居つたにしろ口甲の右派がすゝとらゑて  
しよ。そんな中での「りんご」つて光つてい  
た。

姉は祖父の美形をうかついぢりか、踏を夕  
子口一ににし、お正月の虫社の摩存ど(おお  
科学院といふところへつていふ)お元ダシ  
存極の着物姿存ど本当に美しうと思つた。

貴んが可りスうりとしていた、身長162cm  
祖父は183cm だつたといふ。

塚田之いと結婚可いか?と思つていたが、  
姉はせうにやうにも参加しなかつた。

アリス文藝者の西条人十の辭詞集「少ねた  
かきしき見あひだ」を何回もよんだ。

塚田さん今どうしていらつたか、  
私の学校生活は相違お、6:30刻からいかに  
本實際にほつた愛お今の中学3年迄はすすま

どの町種だつた。甲野の農場の本店の授命が  
 通り、まうともその右の新宿の校庭から中  
 石を二枚かかき来て甲野迄運んだ

マルバイトも少しづつ身化して、まう沼  
 して敗者あり「エッセフ、カムル」などを書き  
 紙、大吾等の気遣いが一踏の許可してくれ  
 る。だが一人にならなそうはつかない、家の  
 子わりをぐまぐまをわり、急いで到達しきり、  
 これはすぐだが、次は上野の校庭までの書  
 物販売、これも気がきかなくして子に任せられた  
 とき、それでもしばらく待つてくれた。

どうもものをうまうまはためた。次は新宿  
 伊勢田での既製服売場、お春様が来たくて、  
 じつと云う、この二の所まで服をつくる人  
 ガーの成り文が、この二の所、何をやることもな  
 りたな、次はよかつた。映画カレでつお菓  
 子子の敗覚、映画の休みの時同い「おせんい  
 ヤマム」だ、と言わなくとも皆買つてくれた。  
 そして映画はほいそとと映画をくくはるか  
 来る、「青い皮膚」はおかげでくくはるか



「いやーね」とつらやるとその聲がふりか  
 えた。「いやー君達も来たら、」とつらやの  
 ぞと弟の矛へよんでくれた。私は先をた、先  
 生を終りをあてた映画を思い出した。

「カサブラノカ」はイングリッドバーグマン、  
 ハニフリポカード、主演の新作中の物語だ。

次の日は一緒に往つた友達とこの話でもち  
 きの、あの様子を思い出せばよかった。君と  
 いややと脚をたてておぼ

映画を思い出したりの不意計算は友達にふつて  
 さうするたが、申しわけないの運送、もう  
 その友達に ~~お~~ いた。

私は甲野と豊月泰の定期券をもつて、212。  
 だから新宿へ行くのは等々代代かかす。  
 Iさんには新宿迄の定期券をもつて、212。そし  
 てその定期券を子おれにかして下さる。私はそ  
 れで改札を出る定期券をふりかかすIさんにか  
 した。それと改札を出るとうち、成功した  
 り事があるのた。Iさんには歌員の2かをり、事  
 業所にたつた212。左か右か出た来た

説

不~~動~~敬だ。小一時間すのこ羊イリかき左がう  
 工さんが来て「ごめんなさい」「ごめんなさい」  
 という私の「学校名を付けは言わないで」と  
 という。今更ながら取りがとう。

私の映画の左さる送少く吉かりとし子<sup>の</sup>た。  
 映画ともう一つ藝中になつたのが中だ。中  
 賢天太<sup>の</sup>から次にとま<sup>り</sup>し<sup>て</sup>み<sup>た</sup>。夕方の  
 中<sup>に</sup>は「世界奇書全集」をよんでい<sup>る</sup>方<sup>と</sup>い<sup>う</sup>  
 人<sup>も</sup>い<sup>た</sup>が、私はも<sup>つ</sup>け<sup>る</sup>少<sup>女</sup>の<sup>説</sup>、少年小説<sup>の</sup>  
 左<sup>に</sup>い<sup>い</sup>、命<sup>惜</sup>た<sup>う</sup>人<sup>な</sup>ら<sup>な</sup>い。しかしお<sup>も</sup>し  
 ろい。藝中<sup>で</sup>お<sup>ん</sup>だ。「吉野<sup>の</sup>お<sup>ん</sup>」の「紫<sup>の</sup>お<sup>ん</sup>  
 の<sup>園</sup>」とか、「お<sup>ん</sup>う<sup>竹</sup>の<sup>花</sup>」や「セ<sup>の</sup>夕<sup>の</sup>城<sup>の</sup>  
 と<sup>り</sup>こ」い<sup>う</sup>お<sup>ん</sup>だ。それ<sup>は</sup>下<sup>宿</sup>途中、学校  
 から甲野<sup>の</sup>駅<sup>迄</sup>行<sup>く</sup>お<sup>ん</sup>だ。軍<sup>も</sup>左<sup>に</sup>  
 れ<sup>ば</sup>自<sup>転</sup>車<sup>も</sup>ない。安全<sup>帯</sup>の<sup>お</sup>ん<sup>だ</sup>。加<sup>賀</sup>岩<sup>ま</sup>ら  
 と<sup>い</sup>ふ<sup>人</sup>よ<sup>う</sup>に<sup>い</sup>ふ<sup>お</sup>ん<sup>だ</sup>。中<sup>に</sup>其<sup>を</sup>や<sup>す</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>足</sup>  
 元<sup>の</sup>少<sup>か</sup>う。しかし上<sup>の</sup>お<sup>ん</sup>だ<sup>か</sup>う<sup>な</sup>い。葉<sup>を</sup>  
 ま<sup>ん</sup>の<sup>袖</sup>着<sup>る</sup>お<sup>ん</sup>だ<sup>を</sup>、つ<sup>け</sup>た<sup>と</sup>も<sup>い</sup>ふ<sup>お</sup>ん<sup>だ</sup>  
 笑<sup>の</sup>お<sup>ん</sup>だは母<sup>が</sup>お<sup>ん</sup>だ<sup>を</sup>、お<sup>ん</sup>だ。母<sup>は</sup>着  
 物の<sup>お</sup>ん<sup>だ</sup>も洋<sup>服</sup>もあ<sup>る</sup>もの<sup>も</sup>あ<sup>る</sup>。しかし

又解りのよく仕事下の方の家の近所様様のみ  
 の学校へ通い終後、様様様のセーブルを  
 れん、毎晩毎晩お眠ら 遠く様の夢をしついで  
 もさうんその肉をゆつて万いもの買出し  
~~夕食の仕立は嫁と私、例の七輪の火がつか~~  
~~おこりやう、ご一生懸命おありだ。~~

映画に夢中になつていふ私、今ごろ反省し  
 ておはいます。

その頃の私の下ルに月1000円だった  
 子供の月謝が500円、朝のバス代 電車代等  
 精一杯だったのが至極満足していた、そんな時  
 子供の階級のふどり場と親の夢は先を  
 った。階級ご多勢行きてる生徒、何年か月謝  
 増) がないでしま、同級生、下級生がふりか  
 ら、左しか子供が月謝をふすめていふ私に悪  
 い。悪いけれどくやしかつた。毎日笑はさ  
 ないだ、心はずたずたに傷ついたので。

おきでゴゴボクしてうのどはない、新版  
 本買えが存んて存く黒い字の服を着ていふ。  
 その七瀬の天とにしてりふ、都立オと五葉

女学校へ入る君の如く、金が「80万くらい」に  
 ありては子がよいと母に言つたのを不承で  
 した。(家一軒3,000—で買ふに決めた) 結果  
 で1ヶ月ほど何年分も押えた、今やゼンボウ  
 だ。ゼンボウのどこが悪い、じつと石を  
 かりをふたす。

そんな先をばかりで、<sup>の</sup>「~~事~~しては  
 いか「この子を一ヶを、二ヶを、三ヶを  
 四ヶと五ヶ一ヶかきと分、右の分子、  
 分子は多く、薬子から取りたつて、  
 のに紀子の先「これ分るもの」と思、  
 その中林先生が担任であつたの、<sup>の</sup>「~~事~~調査と  
 いうのがあつた。13人50人位中、  
 丸辨當(これか豆やいのが混入して  
 いる)の人が2人ときく。あつた、  
 「とうもろこしを  
 いたも」 「さつまいも」 「粟いも」 「とうもろこ  
 し」 「大豆」 存じ代用食とわかれ  
 の、それが新聞紙にうつす。一人辨  
 當を忘れたという人がいた。中林先生はその  
 生徒の弟へ「おまをいかに、おまをいかに」

僕が下つと小腹を二少し二しました。これ半分  
分たべたくれのか存、とカレにイフをわたり  
した。カレドイフが「おどろいた、甲州所が  
はたすつ、川をわたりかからぬが、けしにイフを  
たんでほじりて見な。もうとおどろいた、何  
甲州所方の行意だ、へたなうそとおどろかす  
そのうそに胸を打つくした。まもなく甲州所  
をばやめてしまつた。

少し先方の話をあき、第一の事例の茶田先生  
と西村先生がいらした。茶田は先輩の先生が  
かりに存続去つたの若い先生に皆少く少くし  
た。茶田先生はとうとうとあつた、西村先生  
を茶田となくしどろまどろ、その西村先生は  
あつたが、西村先生は<sup>敬</sup>学<sup>敬</sup>の先生、伊集  
とつたのをあきまていふ。何とこの私が伊集  
をとつていたのだ、西村先生は人舞があつた  
あつたが、いふ生徒は多勢いた。いくら多勢  
いとも命とも思わすか、下駄箱にすみれの  
花を入れたとともなつた、と、ところが西村  
先生には友人がいた。一級への評連之人、大